科学の眼（まなこ）

姫路科学館サイエンストピック
Apr. 15, 2024, No. 597
671−2222 兵庫県姫路市青山 1470−15
TEL 079-267-3001
https://www.city.himeji.lg.jp/atom/

生物シリーズ

夢前川いきもの観察記

アカギツネ

Red fox of Yumesaki river

姫路科学館　学芸・普及担当　徳重哲哉

夢前川沿いで 2020 年から続けているキジの観察の時に、キツネを見かけることがあります。最初（2020 年６月２１日）に姿を見た時にはガチョウをくわえた「こぎつね座」の星座絵（図１）を思い出し、不安な気持ちになりました。2021 年６月１５日と６月２２日にはキジとキツネの遭遇を目撃しました。キジは警戒した様子でしたが、キツネは一瞥（いちべつ）しただけでした（写真１）。

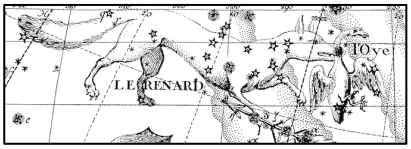

図１　こぎつね座
「フラムスチード天球図譜」仏語版、1776 年（姫路科学館蔵）より

2001 年夏に山崎浄水場前の県道でロードキル個体を拾得したことがあり、夢前川沿いにキツネがいることは知っていました。拾った個体は目立つ外傷がなかったので、剥製と全身骨格標本を作ってもらい、剥製は２階常設展示のジオラマに、骨格標本はゾウの姫子やタヌキの全身骨格標本と共に展示しています（写真２）。

写真１　アカギツネ
2021/06/22 撮影

■アカギツネ[1]

姫路で見られるキツネはアカギツネ *Vulpes vulpes*（Linnaeus, 1758）です。北半球（アフリカ北部、ヨーロッパ、北アメリカ、アジア）に広く分布します。姫路市内では浜手の工業地帯を除く全域に分布しますが[2]、基本的に夜行性のため、意識していないと出会う機会は少ないでしょう。同じイヌ科のイヌ属やタヌキ属と比べると体は細く、四肢や尾が長く、耳介は先端がとがります。体重は４～７kg、頭胴長 578～780㎜、尾長 300～440㎜です。頭骨は吻（ふん）が細長く、横から見た輪郭は鼻骨から頭頂骨前部までが直線に近く、前頭部の盛り上がりが少ないのが特徴です。イヌ科ですが、眼にはネコのような縦長の瞳孔を持ちます。

写真２　アカギツネの全身骨格標本

アカギツネは林に隣接した開けた場所に生息します。夕方から明け方にかけての暗い時間帯に活動し、昼間は寝ています（写真３）。食性は肉食に寄った雑食性で、ネズミ類などの小型哺乳類、鳥類、昆虫類、

写真３　アカギツネの昼寝
2022/05/10 8:30 撮影

[1] 参考：阿部 永、「増補版日本産哺乳類頭骨図説」p. 243、北海道大学出版会（2007 年）
[2] 令和３年度（2021 年度）中大型哺乳類分布調査調査報告書 p. 48、環境省自然環境局生物多様性センター（2022 年）

果実類のほか、人の生活圏ではトウモロコシ、家禽（かきん）や家畜の死肉、残飯類も食べます。余った餌は地中に埋めて貯食します。

アカギツネは１～２月に交尾し、52 日前後の妊娠期間を経て平均で３～６匹の子を産みます。出産と授乳期の子育てはトンネル状の巣穴の中で行い、４週間程度で子ギツネが巣穴の外に出るようになります。巣穴での子育ては母親が中心ですが、父親も餌を獲ってきたり、巣穴から出るようになると、子どもに狩りを教えるなどで協力します。子ギツネは夏の終わりには親元から強制的に追い出され、単独で狩りをして暮らすようになります。これは、近親交配を避けるだけでなく、キツネの餌は小さく、一口で飲み込めるものがほとんどなので、群れで餌を分け合えないことも関係します[3]。

キツネの寿命は飼育下では 10 年程度ですが、単独で暮らす野生個体は短命で、６～７年生き延びることができるのは１％程度とされています[4]。

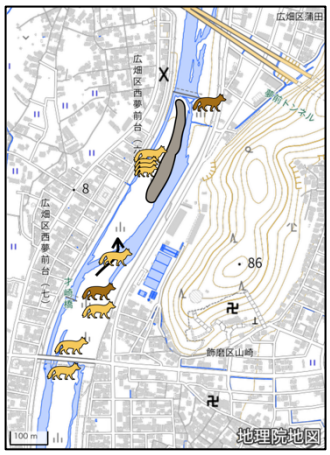

図２　キツネ観察ゾーン
中央上の灰色の部分が 2022 年にキツネの親子を見かけた領域。キツネアイコンは単独で見た場所で、濃い色はオス。矢印のルートで川を渡る姿を２回目撃。左下バーは 100m。

■夢前川のキツネ観察記録、2022 年以降

2022 年にキツネを観察したのは、姫路バイパスから才崎橋にかけてです（図２）。４月１２日から８月１４日までに朝夕のべ 82 回キジチェックを行い、36 回キツネを観察しました。キツネ遭遇率は 43.9％です。

2022 年１月１１日、冬枯れの中洲に穴を見つけました。いつもキジがいる場所なのに気づかずにいました。何かの巣穴かな？と思い時々チェックしていたところ、４月１２日に通りかかった時に顔が見えました（写真４）。すぐに親が現れたのでキツネだとわかりました。この出入口は、出産に向けて新しく掘ったのかもしれません。

写真４　巣穴と子ギツネ
2022/04/12 16:27 撮影

４月２４日に子ギツネ２匹でじゃれ合う姿が見られ、５月５日には母親と３匹の子を確認しました。出産したのが３匹なのか、育ったのが３匹だけなのかはわかりません。５月になると河川敷の草が茂り観察しにくくなりましたが、時折川辺に姿を現した時には、次第に大人の体つきに近づく様子が観察できました（写真５）。

写真５　子ギツネのきょうだい
川辺に水を飲みにやってきた。
2022/05/24 5:05 撮影

５月２２日朝に、中洲で寝ていたオスが立ち去る姿を見ました。メスや子ギツネと比べると色が濃く、尾が細く、毛並みが悪かったので、母親と見分けがつきました。このオスが子ギツネと共に行動することもありました。父親が狩りを教えていたのでしょうか。

６月中旬を過ぎると、早朝や日没後に子ギツネだけで広い河原を駆け回る姿が見られました（写真６）。７月に入ると親子が揃った姿を見ることはなくなり、きょうだい２匹組と母親と子１匹の組み合わせを別々に見かけました。８月１４日に川の浅瀬を横切って中洲の草むらに消える若い個体の後姿を見たのが、この年最後のキツネでした。

写真６　仲良し３きょうだい
2022/6/28 4:30 撮影

2023 年は、朝夕のべ 68 回のキジチェック中、キツネを見たのは４回（遭遇率 5.9％）で、子ギツネは見ていません。2024 年は３月７日に寝ているキツネを１回見ていますが、どうなるでしょうか。

---

[3] 塚田英晴、「野生動物学者が教えるキツネのせかい」p.80～81、緑書房（2024 年）
[4] 同上、P.98